



みやこ

京まなびい News Letter ニュースレター

京都府教育委員会事務局生涯学習部

持続可能な社会について考えよう

令和元年10月5日に開館された「さすてな京都」は、南部クリーンセンター第二工場に整備された、環境について学べる学習施設です。「さすてな」は最先端、素晴らしい、展望台、南部クリーンセンターの頭文字と、「持続可能な」という意味の英単語「Sustainable」から名付けられました。持続可能な社会に向けて、私たちは何をすればよいのか、「さすてな京都」の見学を通して考えました。



京(KYO)も学んじゃおっ!「さすてな京都」編

建物の中に一步入ると、まず巨大なデジタルインフォメーションウォールが出迎えてくれました。気になる写真をタッチすると、説明を見ることが出来ます。



また、2階は自転車や足踏みでの発電体験や、タッチパネルでゴミの出し方などのクイズに挑戦できるなど、環境について楽しく学べるスペースになっていました。



そしてメインの工場見学へ!見学用通路を通して実際に稼働している工場を間近に見ることが出来ます。

ガラス越しのすぐ近くを巨大なゴミクレーンがゴミをつかんで動いていく様子は迫力があり、「私たちは毎日こんなにもたくさんのゴミを出しているんだな」ということを実感しました。

他にも生ごみなどを発酵させて発生したメタンを主成分とするバイオガスを活用する「バイオガス化施設」、大型ゴミなどを破砕して資源となる鉄やアルミニウムを選別回収する「選別資源化施設」も併設されています。

最新の施設を備えている一方で、ゴミとして出されたものはどんなに処理をしても、ゼロにはなりません。不燃物やゴミの焼却により生じた灰は市内の山間部に埋め立てられています。

施設をご案内いただいた職員の方のお話で、「ゴミ減量の3R、[Reduce=リデュース][Reuse=リユース][Recycle=リサイクル]の中でも、ぜひ「リデュース=ゴミの発生抑制、不要なものは買わない」ということを意識していただけると嬉しい」という言葉が印象に残りました。

色んな世代の方が一緒に学べる施設になっていますので、みなさんもぜひ足を運んでみて下さい。



京都市社会教育委員のコラム

まなびいの つぼ



安成 哲三氏
プロフィール

京都大学大学院理学研究科博士課程修了後、京都大学東南アジア研究センター助手、筑波大学教授、名古屋大学教授などを経て、平成25年から人間文化研究機構総合地球環境研究所の所長を務める。日本学会協議会員・連携会員も務める。専門は気象学・気候学、地球環境学。名古屋大学・筑波大学名誉教授。Future Earth 国際諮問委員。

※「社会教育委員」とは?

社会教育法に基づき、生涯学習の計画の立案をはじめ、家庭・地域の教育力の向上や京都の豊かな学習資源の活用など、生涯学習全般に関し、教育委員会に助言を行います。(現在17名)

コロナ禍から気候変動への取組みを学ぶ―「緑の回復」をめざそう―

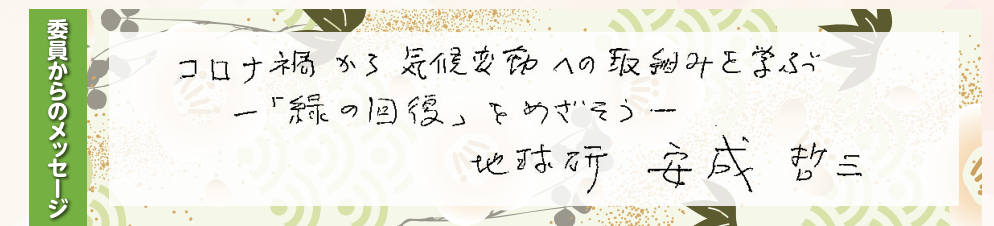
京都市社会教育委員 安成 哲三氏 (総合地球環境学研究所 所長)

西日本に豪雨災害をもたらした長い梅雨が7月末にようやく明けたとたん、8月は記録的な酷暑の夏となりました。このような酷暑の夏は、今年だけではなく、近年特に顕著に増加しています。1946年以降75年間の西日本の8月の平均気温の高かった上位10年には、今年を最高として、2010年以降の実に7年が入っています。

日本の酷暑の夏は、日本付近を覆う太平洋高気圧が非常に強いからです。日本の南の熱帯太平洋やアジアモンスーンに伴う雲活動が非常に活発なため、南北の大気循環を通して太平洋高気圧を強めるからです。熱帯域の活発な雲活動は、高い海面水温に因っています。高い海水温は大気中の水蒸気量を増加させ、豪雨をもたらす活発な梅雨と、その後の非常に蒸し暑い夏をもたらします。海面水温は今、地球全体で上昇しており、特に西部熱帯太平洋から日本近海の昇温は大きくなっています。海面水温の上昇は、CO2などの温室効果ガス増加による地球温暖化が海洋に現れた結果です。近年の異常気象の増加は、海を含む地球の気候が急激に変化しつつあるからです。地球温暖化を抑えるためのパ

リ協定では、気候の危機を避けるために、今世紀半ばまでにCO2排出量をゼロにすることを目標にしていますが、これまでの経済・社会の体制ではとても無理とされてきました。

しかし、今回のコロナ禍は思わぬ結果を私たちにもたらしました。感染の拡大防止のために、2月以降に世界規模で人の動きや産業活動が大幅に抑制されたことにより、1月まで増え続けてきた世界のCO2排出量が、それ以降の3か月間で昨年の平均に比べ20%近くも減少したのです。特に地上交通・運輸と航空機運航の減少による削減が非常に大きいです。通勤をマイカーから公共交通機関や自転車に変えたり、ジェット機利用を減らすことで、CO2排出の大幅削減も十分可能なのです。今回のコロナ禍からの社会・経済の回復は、単に元の状態に性急に戻そうとするV字回復ではなく、むしろコロナ禍で余儀なくされた社会や生活の変化をよいきっかけと考え、より持続可能な新しい経済と社会への転換の可能性を求めていく「緑の回復」をめざすべきなのです。



私たちの生活について考えさせられました

京都市の環境政策については、京都市社会教育委員会でもテーマになりました。京都市の食品ロスは年間6.1万トン(令和元年度)、国民一人当たりでは、毎日お茶碗約一杯分とも言われています。会議では、こんなにも多くの食品が手つかずで捨てられている現状に驚きの声があり、もっと一人一人が意識する必要があるという意見がありました。

私も食品を購入して冷蔵庫に入れたまま、消費期限を過ぎてしまうことがあります。まずは身近なところからゴミを出さない生活を心がけたいと思いました。



約90世帯3日分の燃やすごみから出てきた手つかず食品(2016年度調査より)

今回取材させていただいた施設



京都市伏見区横大路八反田29番地
TEL.075(606)2548 FAX.075(606)2549
休館日 水曜日(祝日の場合は翌平日)
年末年始(12月29日~1月3日)
土・日・祝日及び学校の長期休業期(年末年始除く)に、
無料シャトルバスが出ています

SDGsコーナー



さすてな京都

検索



楽しい
イベントがたくさん!
みなさんも
ぜひ学んで
みて下さい!

「京(みやこ)まなびいニュースレター」の内容についてのお問合せ先

京都市教育委員会事務局生涯学習部(生涯学習推進担当)

京都市中京区富小路通六角下がる骨屋之町549(元生祥小学校)

TEL:075-251-0410 FAX:075-213-4650 メールアドレス:shogaigaku@edu.city.kyoto.jp

京まなびいニュースレター第27号 令和2年12月発行

